RPGヒロインという名のチート野郎。

菜智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＰＧヒロインという名のチート野郎。

【Ｎコード】
Ｎ５８４９Ｙ

【作者名】
菜智

【あらすじ】
大人気ＲＰＧから飛び出してきたのは９割ツンの１割デレなチート過ぎるヒロイン。おまけに、飛び出てきた先には立派なニート。そのニートとチートヒロインがまさかの居候というベタな展開へ発展！？
主人公（ニート）「…あー。頭いてぇ。」
ヒロイン（ちげぇし…）「風邪か？」
主人公

対処1．まず、自己紹介。んで、居候。

ー神とのゲーム。～それは気まぐれ？～ー
そのゲームは何処の会社の誰が作ったのかも分からない、まったくもって謎の多い人気ＲＰＧゲーム。
だが、その劇中に登場する主人公のヒロインが余りにもヲタクの心を鷲掴みにし、古い機種でありながら絶大なヲタク支持を受けている。

そのゲームを、例に漏れることなくしているのが俺、上南集（カミヤシュウ）である。
だが、ゲームをしていると後ろから、自分しかいない部屋の、自分の背後から。
『ほぅ。私はこうして動いているのか。中々、面白い。』
思いっ切り大人びた声がするものだから、後ろを恐る恐る振り返ってみれば
『ん？どうした。私に構わずゲームを進めてくれ。私もこのように見るのは初めてでな。』
見た目そのまんま、今、俺がしているゲームの大人気ヒロインがいた。
「……」
取り敢えず、後ろの＜誰か＞は無視してゲームを進めていく。が
『ほぅほぅ。』
だとか
『このダンジョンはこうなっているのか…。いやはや、興味深い。』
とかずっと言われていれば気にならない筈はなく。俺は一回セーブをすると、メニュー画面にして再度後ろを向いた。＜誰か＞はいつの間にか我がもの顔で俺の後ろにあるベッドで寛いでいた。
『あ！何故止めた！？私は見たいと言うに……。』
「ちょっと待て。」

見るからに、ザ・ファンタジーな服に寄ったシワを伸ばしている＜誰か＞を見ていると
『全く…。どうしてこうシワが出来るのか…』
いや、普通ですから。それ。
『おい、お前。早くゲームを再開しろ。私は見たいんだ。』
この大人気ＲＰＧヒロインを支持しているヲタクからしたら、きっとこの性格は……どうなのだろう。
「あの、さ。貴方は、誰ですか」
『私か？私はお前のしているゲームのヒロイン。名前は、ナツメ。』
俺は心の中で盛大に溜息を付く。もちろん、表には出さないが。
「で、そのゲームのヒロイン様が何故俺の、一プレイヤーである俺の所にいるんですか？」
『さぁ。それは私の預かり知る事柄ではない。』
いやいや、そんな事をどや顔で言われても。どうしろと？
『ここに出てきたのは、私自身の意思では無いからな。』
「じゃあ、誰の意思？」
『……え、と。』
自称ヒロイン・ナツメは少ししょんぼりとしたような、少し言いづらいような顔をした。
『……ゲームの、ボス。』
そんな顔を急に赤らめてぼそぼそと言われて、ときめかない男などいないはずはなく。
「…はぁ。」
だが、そんな現実からぶっ飛んだ事を受け入れる脳など生憎、俺には備わっていなかった。
『ごほん。……とにかく、だ。これから暫くの間、ここで世話になる。』
「……は？」
俺はナツメの言葉を聞き返した。今、なんて言った。
「あのさ。ゲームの中に戻ってくれますか？」

『無理だ。戻れる場所はゲームの何処かのダンジョンらしいからな』
「…つまり、そのダンジョンを見つけないと戻れないと？」
あー。頭痛い。遂に、自宅警備員（りっぱなニート）丸三年の俺にも幻覚が……。
『と、いう訳で。これからよろしくお願いします。な？』
にっこりと笑うナツメの顔が若干怖く見えた。その笑顔の後ろに俺は武器を構える悪魔を見た。多分。
…これは、面倒見なきゃいけないんだろうなぁ…。
これから起こるであろう様々な問題（大体は友達が関係するが）頭が回りそうだ。
…取り敢えず、俺はこのナツメとやらをゲームの中に戻す為にゲームを再開した。
……後ろを気にしないように。

対処2．チートは現実でもチートｗｗ

前回までの振り返り。
大人気ＲＰＧから飛び出して来たヒロイン様はかなりのツンが多いヒロインでした。おまけに、ちょっとの天然。
そんなツンツンデレ少女と一プレイヤーの自宅警備員（チートヒロイン）（りつぱなニート）丸三年の居候物語。

ナツメのちょっと機械じみた声にも慣れ、サクサクとまではいかないがそれなりにゲームを進めていた頃。
俺の胃が空腹の抗議の声を上げた。時間を見れば、大体3時ぐらい（暗くてそれ以上は見えない）だろう。
そろそろゲームへの集中力も切れてきたため、俺は冷蔵庫から晩ご飯の残りを取り出すと後ろで眠っているナツメを起こさないようにご飯を食べた。意外と減っていたのか、胃がもっともっとと食べ物を求めてくる。
気づけば残り物はなくなっていたが胃はまだ足りないと言わんばかりに抗議の音を鳴らし続ける。
ぐぅ。
うん。腹減ってるなぁ、俺の胃よ。まだ足りていないんだろう？分かっているさ
ぐぅぅ。
だが、それは鳴りすぎだろう。
ぐるぅぅぅ。
自分の腹の音ではない音が俺の後ろで唸る。さぁ、落ち着こう。そして、振り向くんだ。
振り向けば寝惚け眼のナツメが恨めしそうにこちらを見ているではないか。
「……狡い。」

「…は？」
「ご飯……狡い。私はまだ食べていないぞ。」
あぁ、あの時にバッチリ起きてて見ていたと。取り敢えず俺はナツメの機嫌をこれ以上損ねない為に、冷蔵庫に行って何か食べる物を探したが……生憎と無かった。
「……無い、のか？」
「あぁ、さっぱり全くだ。明日になればネットで頼んでいたのが届くから明日まで我慢し」
「じゃあ、外に買いに行くぞ。」
…は？今、自宅警備員（ニートとひきこもり）にとっての禁句が出てきたが。
「下には、コンビニエンスストア、があるのだろう？」
「買いに行け、と？」
「そこまで私は鬼畜ではない。私もついて行ってやる。」
あくまでも傲慢ツンの態度は崩さない。ここまでいくともう清々しい。
だが、ここで折れてしまっては自宅警備員（ニート）の名折れ。俺は若干強く。
「俺は外へは出ない。行きたいなら場所を教えるから行ってくれれば？」
「…我を通すつもりか。私に対して。…いい度胸だ」
ナツメは口を手で押さえて小さく、くっくっく、と笑った。そして、いつもの傲慢な微笑みで。
「なら、私が連れ出してやろう。お前の意思とは関係なく、な。」
「何言って」
ナツメは俺の言葉を無視して。
「迅風（シュンプウ）」
その言葉が聞こえてからほんの一瞬だけ、目の前が真っ暗になりナツメの声だけが聞こえてくる。
「どうだ？私の魔法は」
目を開ければそこにはよく見知っているコンビニ＜7時11時＞があった。

「……は？」
「私が魔法を使ってここまでワープ、転移してきた」
「魔法って…！？ここは現実世界だろ！」
そう反論した俺にナツメは特に悪びれる事もなくさらりと。
「私には現実も何もない。私にはただ、魔法を使えるという事実があるだけだ。」
そんな言葉に俺は言い返す気力もなく、ただ項垂れた。

こうして、俺の自宅警備員（ニート）生活は三年という短い期間で終わっちまった。

対処2．チートは現実でもチートｗｗ（後書き）

はぁじめまして！今回はちょっと嗜好を変えてコメディっぽいお話です（、・∀・，）
ゲームのチートヒロインが暴れまくりますｗでも、ちょっとシリアス投入してみたりｗ
ちなみに。私は最近（ちょっと前かな？）シリーズ１５周年を迎えた某シリーズが大好きです。７〇５さんのね（，∀、＊）

対処3．ゲームの戦いは現実では結構なハードｗｗ

前回までのあらすじ。
ツン…もとい、傲慢（ツン）デレなヒロイン様の現実丸無視の魔法によって俺の自宅警備員（ニート）生活は呆気なく終わってしまった。…なんだかなぁ。

コンビニ＜7時11時＞である程度のご飯（勿論ナツメの分も込みで）をどっさりと買い込む。
その中にはご飯…なのか食玩やら期間限定のお菓子やらも入っている。財布が悲しい…。
「早く帰るぞ。」
そんな俺の気も知らずに、ナツメは幼い子供のようにニコニコと微笑む。口調は何ら変わっていないが。
「…はぁ。はいはい。了解しましたっと。」
俺はどっさりと入ったビニル袋を持ち上げると、ナツメが怪訝な顔で辺りを見回している。
「どした…？早く帰るんじゃ「静かに」
ナツメは何時もとは違う声で俺の言葉を遮った。その只ならない雰囲気に俺は黙り込むしかなかった。
「…先に帰っていろ。私の分は取るんじゃないぞ？取ったら、分かっているよな…ん？」
ナツメは俺にそう言うと、足早に帰る方向とは逆の…俺が子供の頃によく行っていた公園へと走っていった。
俺は何かを感じつつも、ナツメのあの雰囲気を再び思い出してそのまま帰路を歩き始めた。

集が完全に去った事を確認して、ナツメは公園に続く並木道の木々に語りかける。

「さて、どうした…。私に何か言伝たい事柄でも？」
『いいえ。単に私が興味を持っただけですよ。ゲームでしか存在しない架空の者が生きている様子に。』
並木の木々から響くような声が反響してナツメの耳に届く。
「姿は見せてくれないのか？私はしっかりと相手を見ないと話せない性格なのでな。」
ナツメは楽しいかのように微笑んだ。その笑みは酷く美しく、妖艶。
『貴方の頼みは断れませんからねぇ……。<あの方>からの命令もありますが』
木々が風も吹いていないのにざわざわと靡き始める。空は清々しいほどの黒と青の相まった見事な景色だが、それとは反対に空気は緊張していた。
「腕試し、というものか？…いいぞ。来いよ」
靡いていた木々の木の葉が散り、一斉にナツメ目掛けて飛来する。だが、ナツメはそれに何の興味も示さない。
ただ、先のように妖艶な笑みで。
「…水槍（スイオウ）」
ナツメに飛来していた木の葉…刃ほどの強度まで強化されていた木の葉が宙でピタリ、と動きを止めた。
ナツメの後ろに仁王立ちするのは水で創られた龍。そしてその頭上で次々に展開されていく同じく水で創られた流星群。木の葉は水に圧倒され、次第に数を減らしていく。
『……ははっ…』
唐突に、声が笑った。その笑いに同調するように木の葉は数を増やして、ナツメに襲いかかってくる。
ナツメはまた水龍に命じて、木の葉を水の流星群で打ち消していく。と、ナツメはある事に気が付いた。何枚かの木の葉がナツメの後ろ、そして、水龍の後ろを通り抜けていく。
先の声が発した唐突の笑い声と、今の木の葉の動きから推測される答えはたった一つ。

（後ろに私が動揺するものがある……っ！！）
ナツメは後ろを向かずに、直ぐ様もう一つの魔法を作動させる。
「っ影身（ウツシミ）！」
ナツメの影を借りて創られたもう一人の＜ナツメ＞は本体であるナツメの意思を受けて、直ぐ様後ろへと瞬間で移動すると＜ナツメが動揺するもの＞を木の葉の刃から守るためにナツメの力を受けて魔法を発動する。
「“護花（ケンカ）”」
影の＜ナツメ＞と＜ナツメが動揺するもの＞に覆いかぶさるように、大きな睡蓮の花が現れる。
「全く。私は帰っていろと、言っていたはずだが」
ナツメの口調はしっかりと怒っていた。しかし、その表情は驚く程に穏やかに微笑んでいた。
「…ははっ。まぁ、ヒロインが戦うのを見るのも悪くないかな。」
その表情に少しは驚きながら、集は言い返した。ナツメは小さく、誰にも聞こえない声で

「馬鹿。」

対処3．ゲームの戦いは現実では結構なハードｗｗ（後書き）

…戦闘シーン楽しかったです。多分一番早いペースで戦闘シーンは書いていたと思いますｗｗ

対処４．チート戦闘終了のお知らせ。

前回までのあらすじ。
取り敢えず、ゲームの戦闘が現実世界でも起こっている…としか、言えない。

「さて、と。もうこれで終わりか？」
ナツメの勝ち誇る顔が集の脳裏に浮かび上がる。
『……秘欺（ヒメギ）。』
声の響きが薄れていくと共に、木の葉はただの葉っぱとして地に落ちていく。代わりに、並木から姿を現したのはゆらゆらと陽炎のように揺らいでいる影。しかし、それはしっかりと歩みをナツメに進めていく。
「バックアップシステム、作動。リンク、オールグリーン。」
影の＜ナツメ＞も後ろの集を護りの花“護花（ケンカ）”に包み込ませたまま、ナツメの隣りに寄り添うように立ち、言葉を二人で紡ぐ。
それが集にはゲームで一度だけ見たことのある技に見えた。
『…言の葉の紡ぎし、彼方に消えた夢幻よ。ここに。』
二人の間からちらちらと溢れていく光の欠片が次第に大きな鳳凰を創り。
『其方は我と共に、照らす光と在れ。』
形作られていく鳳凰は大きく翼を広げ。舞い踊る光の欠片は桜の花弁を模していく。
『誉の翼（プライデウスング）』
鳳凰の清く滑らかな咆哮が周囲に優しく響きわたる。
「お前の技…秘欺（ヒメギ）は、一度に己の分身を大量に発生させる。そして、一体ずつで倒しても直ぐに分身はまた現れる。…私の影身（ウツシミ）の量産系か？」
桜の花弁となった光は先の木の葉のように鋭い刃のような特性を持

つ。
「でも、一度に倒してしまえば何の問題にもならない。」
……ふぁ、さ……ざぁぁぁぁぁぁぁぁ…
光の刃が鳳凰の羽の羽撃きによって、刃となった花弁は次々に影を撃ち抜き数を減らしていく。
だが、その中でナツメは小さな違い…異変に気付いた。
撃ち抜かれていく影の残滓が次第に一つの影に集まっていく事に。
その影は大勢の影よりもかなり後ろの方…まるで指揮官でるあるかのように立っていた。
（つまり、あれが本体…！）
ナツメは、鳳凰の動きを止めるとその影へと微笑んだ。
「全く出てこないからいつもの影（ウツシ）かと思っていたが…そうではなかったな。」
影は口をニヤリ、と歪ませて
『流石は“神力（チート）”の名を冠するだけあって見破られましたか…いやはや残念。』
影の漆黒の黒が糸のように解けていく。その後、現れたのは白髪を腰にまで靡かせている中性的な顔立ち、体をした、しかし男性。
「久しいな。いや、ゲームでは一回のイベント戦闘でしか会ってはいないかアサギ・リヴェリアス」
『確かに。しかも私は影（ウツシ）を通してでしか見ていませんものねぇ。ナツメ・イゥエ・リスティアート。』
二人は和やかな微笑みで。…互いに火花を散らして。
「で。お前が来たということは何かは預かっているのだろう？でなければ、お前が興味本位でこんな所に来る筈がない。あいつは何て？」
男性…アサギは先の微笑みから一転、表情が一変した。何も感じない無表情へと。
『後、三日。それまでに、全てを断ち切るか…自ら<絆>を壊してくるか。』

ナツメの顔に亀裂がはしる。だが、アサギはそのまま静かに礼をすると霧のように霧散して消えた。
“護花(ケンカ)”が消えて集はナツメの所へと向かって、その表情を見て驚いた。
「……あ。どうした？」
ナツメの表情は何かを恐れているような、それでもそれは直ぐにいつもの傲慢な微笑みに戻っていた。
「何を言われたんだ？」
「…知りたいか？」
ナツメは自分の影身(ウツシミ)を戻すと少し迷ってから。
「ゲームの中に戻れる方法がある、と…」
「良かったな！」
集の余りにも嬉しそうな反応にナツメは少し（いやかなり）ムッとした顔で、尚且つ明白に機嫌悪い声で。
「嬉しそうだなぁ…。まぁ、いい。帰るぞ。」
さっさと歩くナツメに集は慌てて追いかけた。

結論
チートキャラ同士の戦闘は見る分は楽しいが、巻き込まれると結構…見応えはあるが同時に生命の危険もある。爆風とかぱないw

対処5．チートのご機嫌ナナメ。

あれから…現実世界で起こったチート同士の戦いの後から、ナツメの様子がどうもおかしかった。
いつも何処か上の空で、俺を見て溜息をついたり…今までに無かった事が。
「ナツメ。お前、どうしたんだ？あの戦いの後から様子が変だぞ。」
「あぁ。気にするな…。別にお前に何か迷惑をかけるでもなし、これは私個人の問題だから、な」
そう言ってまた上の空。こうなってしまってはこっちの調子も狂ってしまう訳で。
まぁ、当然、ゲームも進められないと。
「お前、何悩んでるんだよ。ゲームの中に戻れるんだろ？」
緩々とナツメは首をこっちに向けた。よく見れば目の下にはうっすらと隈が出来ていて。
「…そんなに私が帰る事が嬉しいのか。」
「え？そりゃあ…だってお前の生まれた場所だろ？帰りたいとは思わないのか？」
「…生まれた場所…か。」
ナツメは自嘲するような微笑みを浮かべて、それをまた直ぐに消した。そんな表情を見たことが無いから俺は何か問題でもあるのか、と思ってそれ以上は聞かなかった。
…聞くことが出来なかった。
「さて、少し消える。結構居なくなると思うが…気にするな。」
ナツメは何も考えていないかのような顔で俺にそう言う。
「…もし、私が本当に消去（きえ）たら、どうする？」
そんな質問が唐突にナツメから聞こえた。俺は直ぐに答える事が出来ず、考えている間にナツメは光となって消えてしまった。多分、あの魔法…迅風（シュンプウ）を使ったのだろう…僅かなそよ風が部屋を駆けて消

えた。

一陣の風が何処かの病院の何処かの病室にそよ風として舞う。風の後にはナツメが立っていた。
ナツメの視線の先にはベットに横たわり、眠っている少女。触れてしまえば脆く崩れてしまいそうなほど儚く見える少女は辛うじて生きている。聞こえない程の寝息で。
「……このままだったら、良かった…？」
一人、ぽつり、と呟いても応えてくれる人は誰もいない。
「分かんないよね。うん…分かってる。だって」
白すぎる病室に新たな風が舞い踊る。ナツメは少女の頬にそっと触れた。
肌色も見えない程の肌の色。生きているのかも分からない冷たさ。
まるで、それは人形。
「…いつまで続くのかな」

“いつまで？私が飽きるまで。”

何処からか響く声はアサギのような中生的な声ではなく、しっかりとした意思を持ったしかし何処か気の抜けた声。

“いやいや。全く予想外だな。君の性格ならさっさと言っていると思っていたのに。残念”

「お前…いつからここだと分かった？ここが私の…」

“さぁ？でも僕にとってはそんな事はどうでもいいんだ。”

“君という玩具（ゆうしゃ）が中々帰ってこないからさぁ、僕、暇人なんだよね”

「知らないな。お前の都合なんて」
“んー。でもここでの君も結構面白いからさぁ…。もう少し鑑賞させてもらおうかな？”
「…はっ。私を野放しにしておくとはな。面白い」
声はくすくすと、子供のように笑った。
“後二日。それだけ経ったら僕は君とぉ君の近くに居る人へとびきりの贈り物をしてあげる。”
「……消えろ。」
“うん。そろそろ戻らなくちゃいけないからねぇ。それじゃあねぇ☆”
声は耳に響くままに消える。残されたのはまた静寂。
「…私、は」
呟きに応えてくれる者も、いない。

対処5．5．ゲーム話。（前書き）

今回は本編ではありません。ちょっとした息抜き用の話ですので気楽に見てもらえれば良いと思います。中身はギャグっぽい（？）です

対処5．5．ゲーム話。

「さて、今回はいつもの話とは違って…ちょっとした息抜きで読んでもらえると私は嬉しい限りだ。」
「あのさ…ナツメ。せめて何をするのか位は喋れって。あー、えと…すみません」
集がペコペコと頭を下げる。
「今回は私がヒロインを務める大人気ＲＰＧゲームのあらすじを紹介しようと思っている。」
「大人気って自分で言うか普通…」
「何か言ったか？ん？」
ナツメの極上の微笑みは実はかなり怒っている証拠だったりｗｗ
「はぁ…さて、それじゃあ紹介しますか。余り文字数ももらっていないからな」
「文字数など関係ない。いざとなったら私が作者に攻撃魔法をぶっぱなしｔ（ｒｙ

暗転☆（只今、集が必死にナツメを説得しています。暫しお待ちください。）

「…それでは、あらすじをご覧下さい。」

静かな音がいつも世界中に奏でられる世界・オリシア。その奏でられる清らかな音が消えた時、世界に光では決して照らされる事の無い漆黒の闇に包まれていく……。
その時、誰かが願った。否、誰かではない。世界中の皆が願った。

＜どうか、この救われぬ漆黒の闇をも照らす優しく、清らかな真光（ヒカリ）を…。＞
その願いが誰に届いたのか、それは誰にも分からない。そして、願いは成就された。
世界の何処か、誰も知らない、世界すらも知らない、近くて遠い場所で生まれ堕ちた存在を誰からも祝福されず、神にも見離された清らかな真光（ヒカリ）。
その名は、ナツメ。幻の透き通る桜に誘われた者。
人々の数え切れない程の願いを、己に生まれてから身に封じられていた記憶と過去を背負って。
そして、たどり着く。闇の主へと…自分と同じく誰からも祝福されなかった者へ、ナツメは問う。
「ねぇ…　　」

（こうしてあらすじをしっかりと見るとナツメがナツメっぽくないなぁ…。何というか）
「こうしてあらすじをしっかりと見るとナツメがナツメっぽくないなぁ…。とか思っていないだろうな？」
「……（；＾ω＾）」
「よし、お前。そこから逃げるなよ？」
ナツメが何故かメリケンサック装備で近付いてくる。こうなれば、手段は一つ。
「……俺、生命は大事にする奴だから！ε＝ε＝ヾ（；。Д。）／」
集は逃げた！しかしナツメに囲まれた！！
「ふ、ふふふ。逃げられると思うなよ……？」
暗転☆
「それでは、また本編で会おう。」

「ま、また本編で頑張りまｓ（ｒｙ」
がくり、と集の頭が落ちた。

対処6．新たな波乱はやはりアイツが持ってきたw

「んぅ……ふぅ。」
ごろり、と俺のベッドでナツメが寝返りを打つ。只今、朝の6時を過ぎたところです。
先に言っておこう。俺は変態ではないという事を。
「…は、ん。」
確かにナツメの寝顔はしっかりと見てはいるが、それは不可抗力の結果であって…。えっと、今の俺の姿勢は…、ナツメに腕を掴まれて（もんのすごい力で）ベッドにダイブ。離れようにも力が強すぎて離れられないという
（何の漫画だよ…。このベッタベタな展開は）
「…ん。」
またごろり、と寝返りを打った瞬間俺の心臓は許容範囲を軽く超えた。ナツメの顔が、とにかく近い。
互いの寝息がかかる程に顔が迫ってきている。おまけに、ナツメのいつもより緩んだ顔もかなりのレアな訳で。そんなチャンスの時に離れるなどという愚かしい事をする事など言語道断。
ばくばく、と鳴り響いて仕方がない心臓を無視して俺はその姿勢を維持し続けた。

…後にこの行為が仇になるとは分からずに。

「…信じられない。お前、一回マジで死ぬか？」
「だから、ごめんて。」
あの後、起きたナツメにこてんぱにされたのち…ゲームを再開した。もちろん、盛大なビンタＯＲキックを見舞われた訳だけれど。ビンタの痛みが中々引いていかないなか、唐突にインターホンが鳴る。
「はぁーい」

がチャリと扉を開けても、誰もいない。
「ピンポンダッシュか？」
「ピンポンダシュじゃなかねぇ！」
下を見下ろせば、そこにはぶかぶかのローブを着たちっさい女の子。服装の模様から察するに…。
「ナツメに何か用か？」
「其方、姉様を知っていうのですか？」
あー、うん。このぶっ飛んだ感じはあいつの知り合いだな。
「ユサギ…？どうしてここに」
ナツメがノロノロと奥から顔を出す。女の子（ナツメが言うにはユサギ）が嬉しそうに手をぶんぶんと振る。
「姉様ー。ユサギ、ここまで来たんだぉ。すっごいでそぉ？」
「ナツメ…この人は？」
「あぁ、私の妹のユサギ・イヌェ・オーファだ。」
ナツメがユサギに中に入ってくるように手招きをする。ユサギは靴を脱いで入っていく。一応、俺の部屋ですが？
「姉様。そろそろお家に戻ってくらさいぃ！あたしだけじゃ、お家を維持し続けるのはもう無理ですぅお！」
「そうは言っても…。私はここが気に入ってる。だからここからは出ない。」
ユサギは、むぅ、と大きく頬を膨らまして手をバタバタと振って叫ぶ。
「早くしないと＜あの人＞は怒っちゃうし、兄様だて維持出来ないんですぅぅ！！」
ナツメは観念したかのように深く溜息をつく。
…あぁ、やっとこれで俺の自宅警備員（ニート）生活がカムバックしてくる…。
「そこまで言うのなら、お前が私をここから引っ張り出して連れて帰れ。」
「……はぁ？」
俺は呆れたような、驚いたような声を出す。ここは俺の部屋だって

ぇの。
「分かりました！！」
おい。俺を置いて話を進めるなし。
「私が姉様を無事、連れて帰ります！！」
あー。やっぱり、こうなっちゃうのね。
俺は二人の勝手な話に意識を遠くして、考えた。
きっと、俺の自宅警備員（ニート）生活のサイクルが戻ってくるのはかなりの先だろうと。

対処7．タイムリミットとデジャヴｗｗ

あれからユサギ含めての俺の生活が始まった。
あれから変わったことと言えば、ユサギとナツメが何処かへと出かけていく事が格段に増えた。
「俺としては嬉しい限りなんだけど…なぁ。」
最近ナツメが居続けた影響からなのか、一人がとても静かに感じる。
ただ、ゲームの音だけが部屋に流れ続けた。
あ、レベルが上がった。

部屋の近くの公園の並木道をナツメとユサギは二人で歩く。正確には、ユサギがナツメの後を追いかけるといった感じだが。
「姉様ー。本当にお願いでぅから、戻ってくらさい！！」
「嫌だといったら嫌だ。お前もいい加減懲りろ。」
「あねさまぁ……。」
ユサギが頼りない声を出す。
「後三日したら<あの人>が贈り物するって言ってるけど、っ絶対怒ってますって！！姉様も、あの人も滅茶苦茶にされちゃいますって！」
ぴたり、とナツメの歩みが止まる。すかさず、ユサギが追い打ちをかけていく。
「それに！姉様の目的は果たせたのでしょう！？ならば早くお戻り下さい！」
「ユサギ。」
ナツメの声には怒気が含まれていた。
「姉様…。兄様がどうなっても、いいのですか！？」
ユサギの足音が遠ざかる。

「分かってる。それでも、私は…ここに…」
“贈り物を”
「贈り物…。」
ナツメの頬を冷たい風が通り抜ける。
何時までここにいられるかは、ナツメにも分からない。
ただ、時間が＜あの人＞が許す限り…ここに居たいと、ナツメは思う。

がチャリ、とドアが開く音がした。きっと、ナツメとユサギが帰ってきたのかと思って覗けば顔をムスっとさせたユサギ一人だった。
「ナツメは？一緒じゃないのか？」
「姉様なら一人で歩いてくるって言いました！」
ユサギはベッドにダイブするとブツブツと一人で呟く。
「大体、姉様が居ないと兄様だって維持することは難しいのにぃ…。姉様てば、ここでの生活が＜名残惜しい＞のではないのでしょうか…。でも早く帰還しないと＜あの人＞は特大の爆弾を落とすつもりでしょうしぃぃ…！」
「ナツメをどうしてもゲームの中に戻したいんだな。」
ユサギは驚いたように俺の方を見るが、今までの呟きを聞いていれば誰だって分かる。どれだけナツメを心配しているかを。
「姉様が居なければ兄様だって……」
「心配しているのか？その、お兄さんもナツメの事を」
「えぇ……まぁ」
ちらり、とユサギはカレンダーを見る。
皆様（どくしゃさま）には言い忘れていたが、今は１２月の２９日。後２日で年が終わり、新たな年が始める。
「後２日以内に戻らなければ、盛大に怒られてしまうのですぅぅ！」

「怒られるって、誰に？」
「えぇと、それは……のぉこめんと、というモノを使わせてもらうのですぉ。」
ユサギは少し気が紛れたのか、帰ってきたときよりもニコニコと笑顔を零すようになっていた。言葉遣いも戻ってきてしまったが。
「それに兄様だって……姉様が居なければ…。」
「さっきから兄様兄様って言うけどさ、何か事情でもあるのか？」
「…ゲームで、兄様を出現させる方法はご存知ですか？」
ナツメの、ヒロインの兄がゲーム内に居るなどそれまで一回も聞いたことがない。自他共にゲームヲタクである俺さえも。
「どんな条件なんだ？」
ユサギは、にま、と笑うと
「それは内緒れす！それに、時が満ちれば、分かりますよ。」
そう言うと、ユサギはベッドに突っ伏した。そのまま数分後には寝息まで聞こえてきた。全く、子供らしいというか何というか。
さらり、とユサギの髪が俺の手に一房落ちる。その感触は正に人間そのもの。とても、ゲームのキャラクターには見えない。
「ふみゅ。……にゅ…」
ごろり、と体勢が変わり顔が俺の方に向く。余りにも可愛らしいその寝顔に顔が綻ぶ。
だが、俺はこの時点で気付くべきだったのだ。
「……この」
これが、デジャヴだということに。
「っっっ変態」
あぁ、意識が飛んでいく5秒前。
「がぁぁぁーーーーーーーー！！！」
がす。鈍い音がする。
俺の意識は5秒を待たずに飛んでいった。

対処8．短いしあわせ、解かれた矛盾。

『きっと、必要としてくれる人はいる。こんなに広い世界なら。』
いつの記憶で、誰の記憶なのか。それは分からない。
でも。
『だから、全てを投げ出すような事だけは…やめる。それを約束。』
何もかもを失ってでも、その記憶だけは残したいと思った。
誰かと会話した誰かの記憶を。

「…さむ。」
朝の寒さにナツメはノロノロと瞳を開けた。見れば、集はゲームをメニュー画面にしたまま微動だにしない。寝惚け眼で見れば。
「すぅ…すぅ。」
心地よい寝息をたててていた。ナツメは思わず微笑みを零す。
だが、そこで、はたと気付いた。自分にはやらなければならない事があると。
「まぁ、半分は諦めたのに……ね。」
自嘲するように、ふ、と微笑む。ナツメは毛布をベッドから引きずり落とすと、起こさないようにそっとかける。
こっそりとゲーム画面のメニューを消すと、そこは何回か見たダンジョンだった。進んでいないのか、それともレベル上げのため来ているのかは集が眠っているため確認出来ないがその画面はナツメの不安を増殖させた。
（もう…。時間が…）
ウトウトと眠気がナツメにゆっくりと襲いかかる。
「ふぁ…ぁ」
大きく欠伸をすると、もぞもぞとベッドに戻った。

「姉様ー。」
「嫌だと言ったら嫌だ。」
またいつものように、二人が口論…只の口喧嘩をしている。
「ナツメも一回は戻ってやれって。」
ナツメは暫しの間、こっちを見ていたが
「……分かった。」
やがて溜息をつくと、妥協したように立ち上がった。
「姉様……！！」
ユサギの表情は何故か悲しそうな顔だった。
（あんなにも連れて帰りたがっていたのに？）
「と、言うわけで。」
ナツメがくるり、とこっちを見る。
「短い間、世話になったな。」
その顔は笑っていて、悲しげで。俺は思わず不安げになった。
何か、二人ともが戻りたくないかのように見えて。
「そんな不安な顔するな。どうせ直ぐに戻れるさ。それまで、精々私を思い出して一人で泣いていろ。」
「誰がそんな事するか。」
ナツメは口に手を当てて、くすくす、と
とても楽しそうな笑顔を見せた。
「姉様。では…戻りましょうか。兄様の為にも」
ユサギがそう言って、部屋の外に出る。
「ここから、帰るんじゃないのか？」
「一応、私にも感慨に浸りたい時間は必要なんだよ。自宅警備員さん？」
ナツメはまた笑うとそのまま、部屋を出ていった。

部屋を出て、並木道を二人は歩く。
「姉様…。本当によかったのですか？」
「何が？」
「あの人の事…です。何も言わなかったのでしょう…今ならまだ」
「もういい。」
「姉様……！」
「もういいって！！！」
ナツメが今までにない声で叫ぶ。その声に思わずユサギは体を強ばらせる。
「わたしはもう全て決めた。私一人で……終わらせる。」
決意したナツメを待っていたかのように体にノイズがはしり、
“お帰りなさい”
あの声が木霊する。
“全く、早々に決意してもらえて僕、嬉しいよ。”
「満足か？この結果は、お前の思う…観劇するに値するものだったか？こんな、こと」
ナツメの声がどんどん小さくなっていく。
“んぅーと。正直に言っちゃうと、余り。もうちょっとアクションがあるかなぁとか思ってたのにぃ…”
「残念だったな。ご期待に沿えなくて。」
“だから……”

キン、とナツメの頭に痛みがはしる。その痛みと共に、解れて溶けていく、誰かの大切な記憶が。
「あ……え、ぇ？」
解れていくなかで揺れて、波のように頭を駆けていく。
“もうちょっと…ね？”
「やめて…！姉様に酷い事は、しないで！！」
ユサギが手を握り締めて、叫ぶ。
“酷い事？違うよ？元に戻すだけなんだ。捻じれてしまった記憶を、ね？”
更に痛みは酷く、ナツメを苦しめる。
“いっつ、しょうたいむー。にゃは☆”
ぼん、と空に音が鳴る。
見上げれば、そこには
「花、火……？」
ユサギが呆然と呟く。
そこには綺麗な、観る者全ての目を惹きつけるような花火が上がっていた。冬に有るはずのない。それと、同時に。痛みは増して、遂に。
「あ、がっ……！？」
頭の記憶が一斉に弾けた。
時同じくして。

集もまた、頭の痛みを感じて。
耐え切れずに、そのまま意識を手放した。
集の記憶が
ナツメの記憶が
解けて、溶けて。
始まる。

対処8．短いしあわせ、解かれた矛盾。（後書き）

次からはギャグというか、明るさはなりを潜めます。
どうしても話の核に触れる部分になってしまうので…。
でも、読みやすく！わかりやすく！をモットーに頑張っていきたいです。
因みに、本編でナツメがニートの事を＜にぃと＞と言ってるのはニートの事を本人が余り分かっていないからですw

対処9．り・すたーと。

暗い、暗い海に体がゆっくりと落ちていく。
でも、そのスピードは恐ろしく遅い。
違う、これは記憶。記憶が体のようになり、落ちていく。
何処まで落ちていくのかは分からない。
終わりの無い。何時までも続くそれは、まるで続き終わらない
あのゲームのよう。

「……ん？」
集が目を開けると、何もないいつもの部屋。だが、集はそこに大きな違和感を感じていた。何かがぽっかりと抜け落ちてしまったかのように。
ただ、古い機種のゲームのＢＧＭが聞こえる。
「あれ、こんな事してたか？」
電源を切ろうと手を伸ばして、止めた。
このゲームに何かがある。自分の抜け落ちてしまった何かが。
「このゲームで、俺は何を…？」
「あー。やっぱり、でしたかぁ。」
いつの間にかベッドに座っていた女の子は分かっているような微笑みで舌っ足らずな言葉で。
「お前は？」
「あぁ…ぁたしの事も忘れてしまってぅ？姉様の記憶と一回解してしまった影響なのかぁな？」
女の子はこて、と首を傾げると。
「私は、ユサギ。貴方の抜け落ちてしまった何かを全て知っている。」
集は思わず身を乗り出して、ユサギの肩を掴んだ。

少し、力が入ってぎりぎりと肩が締まる。
「…い、たっ。…痛いです。離してぇ。」
「あ…、ごめん。」
ぱ、と直ぐ様手を離す。ユサギはニコニコと笑うとゲームのコントローラを取った。
「嘘ですぉ？大体、私はゲームでの存在ですからぁ痛み等感覚はありません。それよりもぅ、私達の事と、貴方との関係をお話しまそぅ。」
ユサギの顔が一変、何も感情を映さない瞳になる。それはまるで、ゲームに出てくるＮＰＣ。その様子に、集は只、信じるしかなかった。

やがて、ゆっくりと落ちる感覚が消えていく。
地、なのか分からない。そこはとての柔らかくて地に足を付けているというよりも、浅めの沼に足を浸しているかのような…。

“お帰りなさい。待っていた、ずっと。”

あぁ、この声に私は何故か安心する。忌み嫌っていた筈のその声を。全てを奪って、私を閉じ込めた、この声に。

“君の願いは届かない。彼の記憶は全て解けてしまった。君の事も、短い間過ごしたあの頃も、彼の中には一つも残ってはいない。”

そう、私は只、あの人ともう一度会いたくてこの場所から抜け出した。
私はとても傲慢だったけれど、それで、あの人を困らせたけれど、それでもあの人は笑っていて。
それだけで、もう良かった。例え、全てを忘れてしまおうがあの人

が笑顔でいてくれるのなら…満足。

“君は満足したのでしょう？なら、次は僕の番。さぁ、ゲームの続きをしよう？君が来るのを…、待っているよ？”

キャラじゃない事を言う、って笑ってくれるのだろうな？きっと、お前は。

自嘲するように笑って、私は呟いた。

「ログインする。強制シャットダウンを選択コマンドから消去。」

もし、もう一度会えるのなら

きっと、私は出来るかな？

元の私で。

「　　。」

って言えるといい。

さぁ、ゲームを始める。もう、現実（あのころ）には戻れない

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5849y/

RPGヒロインという名のチート野郎。

2011年12月1日19時52分発行